

## 〈書評〉

## M・バルガス＝リョサ 『パンタレオン大尉と女たち』

(高見英一訳，新潮社，1986年)

バルガス＝リョサの小説を製作年代順に読むと、『パンタレオン大尉と女たち』(1973)は重要な転換点となる作品だということがわかる。すでに邦訳のある『緑の家』(1966)や『ラ・カテドラルでの会話』(1969)はペルーの歴史的・政治的・地理的な現実を、それに見合う複雑な構造と斬新な手法を用いて描出した、いかにもシリアスな小説である。ところが『パンタレオン大尉と女たち』は文学に馴染みの少ない人々をも読者として獲得した、特異な小説である。その人気はとりもおさず作品の基底を貫くユーモアによるものである。バルガス＝リョサ自身、この作品ではじめて、創作を苦闘ではなく楽しい作業と感じたと述べている。しかしそこには、当初から一貫して追求されてきたペルー社会の現実への深い切り込みが忍ばせてあることを見落してはならない。1977年に発表された『フリアおばさんとへぼ作家』では、ユーモアとパロディーへの方向性が一層強く打ち出されている。

それ以前の作品と比較した場合、『パンタレオン大尉と女たち』は形式的には大胆なまでに単純化されているにもかかわらず、多くの共通項を有するのも事実である。特に、『都会と犬っころ』(1963)と『緑の家』との関連を指摘することができる。前者とは、軍隊組織の性格と規律の問題が共通している。また、職務に忠実でありすぎてわが身の破滅を招くガンボア中尉の人物像は、パンタレオンのそれと二重写しになって浮かび上がる。後者とは、アマゾン流域のジャングルという設定が類似している。海岸に面した都市部とも山岳地帯のインディオ世界とも異なるジャングルを、バルガス＝リョサが好んで

作品の舞台として取り上げるのは、この独自の空間に、ペルーの後進性、社会的な不公正、弱肉強食の暴力的な環境を見出しているからである。この空間を扱うことで、社会的また文化的統合がいかに困難な課題であるかが強調されるのである。その執着ぶりは、ホセ・マリア・アルゲダスのアンデス世界のそれにたとえることができよう。さらに、歪められた性と猥雑な雰囲気、両方の小説と共通している。倒錯的な性行動、売春、強姦などが飽くことなく取り上げられるのは、そうした卑猥な現実を陰蔽しようとする、「道徳的な」行動様式へのバルガス＝リョサの関心ゆえである。抑えがたい性的衝動が、規律を何よりも重んじる軍隊との絡みで描かれるところに、ユーモアの介入する条件が作られる。同時に、独自の堅固な論理を誇る軍隊が、非合理と原始性の支配するジャングルで、どう行動するかという状況設定も興味深い。

さて、この小説はパンタレオンにまつわる物語を軸に繰り広げられるが、表現形式に基づいて構成を見ると次のようになる。

1章：会話

2章：軍の報告・通達

3章：妹へ宛てたポーチャの手紙／パンタレオンの夢

4章：軍の報告・通達

5章：会話

6章：軍の報告・通達／シンチからパンタレオンに、マクロビアからポーチャに宛てた手紙

7章：ラジオ・アマゾンの放送／パンタレオンの夢

8章：会話

9章：エル・オリエンテ紙の特集記事

10章：会話

全体からわかるように、会話と軍の報告・通達が主要な形式となっている。また、作品のユーモアはこの部分に集中している。

時間と場面を異にする会話の連続、いわゆるモンタージュによって会話の章は構成されている。1章を例にとれば、妻と夫、それに母親を加えた家族

の会話に始まり、フランシスコ修道士の信者への呼びかけ、パンタレオンと軍の首脳との会話、イキートスの民衆の軍への抗議、従軍僧の抗議、バーの経営者や常連客とパンタレオンの会話などが、時間や場面の移動について言及がなされないまま、次から次へと続いていく。会話における目新しい手法としては、地の文にこれまででない工夫がこらされている。会話体においては、「...とAは言った」とか「...とBは尋ねた」とかいう文を出さなければ、誰と誰の間に会話が成立しているのか判断できない場合がある。そこでどうしても、目ざわりで単調なこの説明が必要となる。ところがこの作品では、全知の語り手による情景とか人物の描写がほとんどないかわりに、地の文の中にそうした情報を盛り込むことが試みられている。

「あら、もう起きていたの、坊や」レオノール夫人は、ゴキブリがネズミに食われ、ネズミが猫に食われ、猫がトカゲに食われ、トカゲがジャガーに食われ、ジャガーが十字架にかけられ、その残骸をゴキブリが貪り食っている夢を見て恐ろしい夜を過ごし、明け方に起き、暗い部屋のなかを両手を揉みながら歩きまわり、鐘が6つ鳴るのを聞いてパンタの寝室のドアをノックする。「どうなの、また軍服を着たの？」(p.287)

「イキートスの住民全部がぼくの軍服姿を目にしましたよ、お母さん」と言ってパンタは軍服の上着が色褪せ、ズボンがだぶだぶになってしまっている事実を痛感し、鏡の前で種々なポーズをとって眺め、すっかり憂鬱な気分になる。(p.287)

本来、消極的な意味しか持たない地の文の機能をふくらませることにより、会話だけの組合せで物語の進展が可能になるのである。また会話体の重視は、映画製作が念頭に置かれていたことと関係がある。実際、この小説は後に作者自身のシナリオで映画化されている。

次に軍の報告・通達には、特有の術語や語法が随所に現われている。ここにユーモアが生まれる。つまり、目的の愚かしさと、「科学的」で厳密な方法との落差にそれは起因する。また、文章のいかめしさが一段とその効果を高めている。さらに、報告の厳粛な文体と軍人たちの会話における俗語表現と

の大きなずれも、アイロニカルな効果を生み出している。

ポーチャが妹に宛てた手紙からは、家庭での夫の奇矯な行動の真の原因をはかりかねている妻の様子がうかがえる。無邪気で世間知らずの彼女には、パンタレオンの任務が、遠隔地の兵士のために娼婦を軍の正式な機関として組織することだなどとは想像すらできない。この点ではレオノール夫人と同様である。イキーストで見聞したことに對する彼女たちの反応ぶりからは、都市に生活するブルジョアの凡庸な精神構造が浮き彫りにされる。

パンタレオンの悪夢がシュールレアリスティックな筆致で描写される部分では、自信にあふれたと見える指揮の背後にひそむ恐怖や強迫観念が、極めてグロテスクな形で提示される。この箇所を除いては、人物の内面が深く描き出される部分はない。内面描写を意識的に避けたのは、メロドラマの典型のごとき描き方をすることで人物の戯画化を図ろうとしたためと考えるべきであろう。悪趣味の典型としてのメロドラマへの作者の関心は、『フリアおばさんとへぼ作家』にも明確に示される。

シンチは、ラジオという媒体の影響力を最大限に活用して、私腹を肥やそうと図る偽善家である。「民衆の支持を得て話し、大多数の人々の無言の、しかし、正当な考えを代弁する術を心得ている人間として」(p. 194)、貧弱な内容の郷土愛を煽り立てることで「公共のモラル」と「秩序の維持」を訴える。

「わたしたちに必要なのはわたしたちの知的精神的レベルを高めること、わたしたちの知識、とくに、わたしたちを取り巻く環境とか生まれた土地とかを保護してくれている都会(イキースト)についての知識を深めることであります」(p. 191)

「アマゾン地区における進歩と道徳と文化とペルーに対する愛国心の向上を願ってのわたしたちの改革運動をせき止められるものは何もないでしょう」(p. 197)

臆面もない論調が支持を得るのは、アマゾン地域の文化的後進性がその理由と考えられる。一聴取者から寄せられた手紙が、綴り字の間違いだらけというのもこのあたりの事情を端的に物語っている。フランシスコ修道士の狂

信的な布教活動が多数の信者を獲得していくのも、この地域の住民の無知と迷信深さに根ざしている。パンタレオンを脅迫できなかったシンチは、「婦人巡察奉仕機関」の実態を放送で暴き立てる。しかし作品の終わりでは、攻撃したはずの機関に属していた娼婦を相手にし、パンタレオンもフランシスコ修道士も消えた今はゆすりの対象がなくなった(p. 319)と嘆いているが、これこそ彼の正体なのである。

エル・オリエンテ紙の特集号は、パンタレオンの愛人で娼婦のブラシレーニャの殺害事件を報じているが、その扱いにおいてシンチの放送と相通じるものがある。事件の詳細な記録とブラシレーニャの生い立ちの紹介、さらにはパンタレオンの追悼演説の全文掲載などには、スキャンダルを執拗に追い求め、それを報道の使命と居直るマスコミの体質がよく示されている。ラジオ・アマゾンの放送と同じく、この記事には型にはまった陳腐な表現がいたるところに用いられている。

こうした多様な表現形式を採用することにより、多くの視点が導入され、異なる立場からの事件に対する様々なとらえ方が提示される。同時に、それぞれの解釈や反応の相違が、作品における現実への複眼的でアイロニカルな理解を可能にしてくれる。

複数の表現形式の組合せで作上げられたこの小説は、それでも他の著作と比べると、明確な物語の筋が書き出しから結末へと時間の流れに沿って示されている点で、読み易いものとなっている。軸となる物語は2つで、パンタレオンの行動の顛末が主旋律を形成し、フランシスコ修道士の率いる「箱舟教団」を巡る物語が通奏底音となっている。2つの物語は、ブラシレーニャの死亡事件を機に接点を持つことになる。また、フランシスコ修道士の活躍から死への過程は、パンタレオンの作戦の成功と「機関」の解体に呼応している。「箱舟教団」がジャングルの原始性のシンボルだとすれば、「機関」はジャングルの「近代性」と「科学精神」のシンボルである。

パンタレオンの物語は以下のような進展を見せる。

①大尉への昇進と新たな任務の通達。

- ② 周至な準備と調査。「機関」の設置へ向けての精力的活動。
- ③ 組織の確立と拡大。他のどの機関より強固な組織に成長。それにとまな  
い「機関」が軍部関係者以外にも知られることとなる。
- ④ 辺境地域住民の不満と派遣隊への襲撃。ブラジレーニャの死。
- ⑤ 葬儀にパンタレオンは軍服姿で現われ、追悼演説を行なう。軍首脳部の  
驚き。
- ⑥ 「機関」の解体命令、パンタレオンのチチカカ湖畔の寒冷地への配属の  
通達。

パンタレオンの人物像は、その行動や家族あるいは娼婦たちとのかかわり  
の中で明らかにされていく。そこには冷笑的なユーモアがふんだんに盛られ  
ている。扱いの微妙な任務が彼にあてがわれたのは、「たばこは喫わない、酒  
は飲まない、目はきょろきょろしていない」、「品行方正な将校」、「天国の軍  
隊を代表するような聖人」(いずれも p. 9) という模範的な軍人ゆえである。そ  
の彼が、およそ模範的とは言えない使命を託されたところに悲喜劇の出発点  
がある。命令の完遂へ向けての覚悟は悲壮なものがある。

「我が名誉ある陸軍将校の身分をかくし、兄弟とも思う戦友から別れてい  
なければならないことは悲しいことではありますが、そしてまた、このために  
小生の母親や妻にたいしては、その任務を絶対に秘密にしておく必要があります、  
従って、常に家族の和合を保ち仕事を成功させるためには、ほとんど常に真  
実に反することを言わねばならないので、小生の家族関係に微妙な問題が生  
じるかもしれませんが、小生はこの取決めに絶対服従しなければならないの  
であります。上層部に依頼されたこの作戦行動を遅らせることは許されない  
ことであり、ジャングルの最も遠隔の地において祖国のために働いている兵  
士たちにとって意義あるものと自覚して、小生はこの犠牲的行為の妥当性を  
認めるものであります」(p. 36)

彼が最初に取りかかったのは、「婦人巡察官」の「奉仕」に対する需要を数  
量化することであった。アンケートの文面のいかめしさやデータの「科学的」  
な処理方法と、その内容の愚かしさの乖離が読者の笑いを誘う。さらにデー

タの作成にあたっては、妻との性交渉をも参考にするという念の入れようである。娼婦を組織するために近づいたチニートの奇妙なスペイン語が、いつの間にか身につけてしまい妻を驚かせる箇所や、性欲を促進する食物の真偽を自ら試してみるなども、職務への盲目的な忠実さの現われである。職務を正当化し、軍における重要な「機関」を作るため、売春行為は「奉仕」、娼婦は「婦人巡察官」、客は「利用者」というもっともらしい名称に変えられる。パンタレオンが大真面目であることに変わりはない。「機関」の設立1周年を記念して作られた賛歌も、陳腐な歌詞もさることながら、低俗な流行歌の曲に合わせて歌われ、軍の厳粛な賛歌としてはいかにも不釣合である。優秀な「巡察官」を採用するため、彼がじきじき候補者の「検査」を行なうが、ここまでくると正常な判断力が疑われる。

ブラシレーニャの葬儀での「荘重な」追悼演説は、軍の首脳にはこの上なく苦々しい行為と映り、ジャーナリズムには恰好のネタを提供することになる。

「いついかなるときもあなたは周囲を豊かにし芳香で満たす絢爛豪華な花であり、スタッフは常にあなたの義務感を、疲れを知らぬ愛想のよさを、崇高なる友誼と協調精神を、あなたを飾るその他もろもろの美德を賛美し、尊敬し、愛しておりました。彼ら全員の名において、私は涙を抑えてあなたに告げたいのです。あなたの払われた犠牲は無駄ではなかったと。換言すれば、無惨にも流されたまだ若いあなたの血は、今より私たちをより強い力で結びつける聖なる絆、そして、かつてあなたが実行したように、無私無欲の心をもって完璧に私たちの義務を果たすべく私たちを日々導び励まして下さるかがみ鑑となることでありましょう」(p. 266)

会話で成立している章が、「起きてよ、パンタ」(p. 7, p. 115), 「起きなさい、お前さん」(p. 223), 「あら、もう起きていたの、坊や」(p. 287) というように、ほとんど同じ内容の、妻か母のパンタレオンへの呼びかけで始まっているのも、彼の職務への絶えざる献身を反映したものとなっている。作品の結末が「5時だって言ったでしょ。起きてよ、パンタ」という妻の会話になってい

る点にも注目したい。新たな職務の遂行に励むパンタレオンの姿は目に見えている。また、作品の書き出しと結末が同じ会話になっているのは、円環構造が念頭に置かれているからである。パンタレオンは新たな任地においても従来の勤勉さで職務の遂行にあたるだろうことを示唆している。「機関」の仕事での失敗は、彼に特に新しい認識を与えはしなかったのである。

なぜ「機関」が解体されねばならないのか、その理由をパンタレオンは最後まで納得できない。上官の命令が彼にとっては何より優先するのである。

「わたしは商売には関心がないのだから。それに、わたしにとっては上官がいるということが必要なのだ。いなければ、どうしていいかわからなくなるだろうな、世界が足もとから崩れてしまうだろうな」(p. 304)

ユーモアを基調として描かれながらも、パンタレオンは、バルガス＝リョサの作品における挫折を繰り返す人物の一部を形成する結果となる。その不幸は、命令の執行に熱心なあまり、その実質を見抜けなかったナイーブさに起因する。軍人としては立派に見えながら、家庭生活では幼児性から脱却できていない事実が、このナイーブさを説明してくれるであろう。自らの創設した組織そのものの犠牲者と化してしまう彼だが、それでも軍隊に反感を覚えることはない。軍隊の原則が彼にあってはすべてなのである。

軍隊におけるヒエラルキー、さらに海岸とジャングルそしてアンデスの間に存在する地理的・社会的ヒエラルキーも重要なテーマとなっている。「機関」は当初、一般兵士の性欲の解消を目的として機能する。組織がある程度軌道に乗ったところで、下級将校たちが「奉仕」の提供を申し出るが、ここには下位にある者ほど本能的な行動をとるものだという固定観念が無批判に展開されている。その実、將軍とか元従軍僧とかも娼婦との交渉を持っているのである。またパンタレオン一家が、リマをはじめとする都市への強い憧憬を抱くのも、都市がペルーの中枢を形成しているがゆえである。イキートスでのパンタレオンの作戦行動も、リマにいる將軍たちの指令に基づいて進められていくのである。

結論としてこの作品は、ユーモアとアイロニーを通じてヒエラルキーに支



配された社会構造，とりわけ軍隊に対する批判を展開したものである。また，パンタレオンの滑稽さは，性欲というまったく私的領域にかかわる事柄を軍の規律という公的領域の事柄と縋い交ぜにした結果なのである。

ラテンアメリカ文学全般を通して新しい武器となったこの「笑い」を駆使して現実を抉り出すという，バルガス＝リョサの文学の新境地が，翻訳により確認できることは，ラテンアメリカ文学に関心のある者にとって極めて意義深いことである。

最後に，訳文は全体として読み易いものとなっている。ただ，場面に適合しない訳語が使用されているケースが散見される。特に会話文で，話しことばとしては通常用いないような表現が充てられている場合があるのが惜しまれる。

山蔭孝夫（京都産業大学）

